



シンハラ人定住地。モナラーガラ県。サルボダヤが支援している地域で、入植先でLTTEからの攻撃を受け、当地へ避難してきた。政府から土地の提供を受けて定住が決定した。仏教僧がコミュニティのリーダー的な役割を果たしている。



再定住先で建設した家とその家族。壁は粘土で屋根は藁を利用している。主な収入源は、落花生とトウガラシ栽培。最近象による被害が多い。また、精神的な障害を持つ長女がいるが、家族は治癒すると希望をもち、多額の治療費を捻出している。



象に破壊された家と主。夜間、収穫した農作物を狙ってやってきた象が、家を壊して収穫物を奪い去った。



セワランカ活動現場ポトゥウィルの近くの村。中央の女性は、セワランカでプライベート・ボランティアとして活動している。主に村落開発等を手がけている。



村の近くにある小規模灌漑タンクのあったところ。紛争中は維持管理されなかったため、水もたまらない状態になっている。農民の一番の目標はタンクの改修である。



同タンク堤体で、農民及びセワランカスタッフから説明を受ける。小規模灌漑タンクは農政局が管理し、農民組合へ維持管理を全面的に委譲する計画である。

2002年10月 8 日



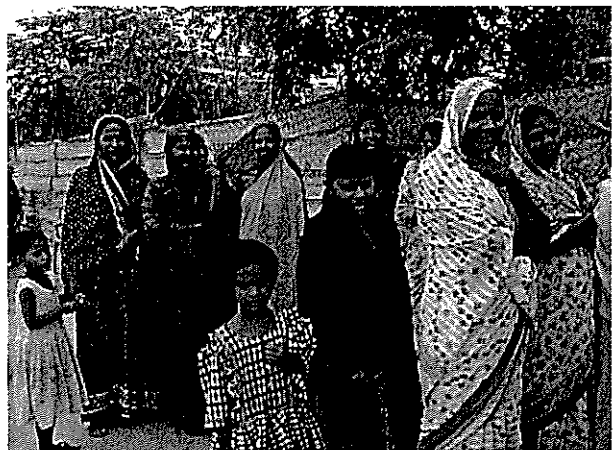
同村近くの家のトイレ。ココナッツの葉を編んだもので壁を造ってある。



トイレの中は、便器も何もなく砂地のまま。ここで用を足すため、悪臭が漂っていた。



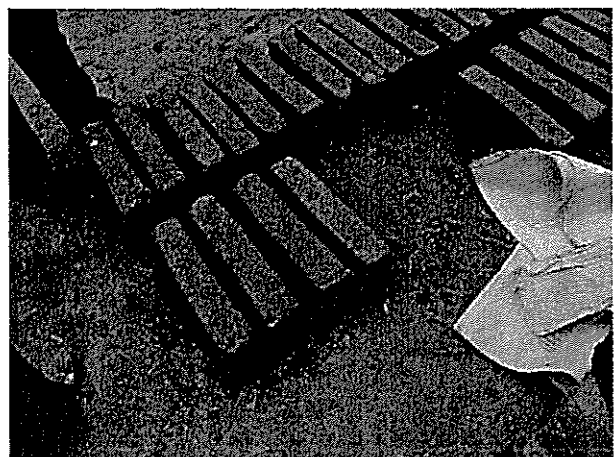
ムスリム再定住村。モスクが土地を提供し、国内避難民が再定住している。避難民はジャフナ地域からも来た。サリーを着た女性はサルボダヤのフィールドワーカー（タミル人）。



ムスリムは、女性と男性は分かれてグループを形成しがちである。このときも、女性の意見はほとんど出なかった。リーダー的な役割はすべて男性が担っている村であった。



トイレ建設用のコンクリートの板。これを組み合わせて、トイレの主要部分が造れる。外壁とドアは各世帯が自費で建設する。



コンクリート板の製造も、技術を持った住民が行うように計画し、住民が何らかの方法で収入を得る形で事業を進めている（サルボダヤのプログラム）。

2002年10月14日



トリンコムアリー県、カンタレー付近。トリンコムアリーにはセメント工場があり、セメントを運搬する大型トラックが頻繁に走る。



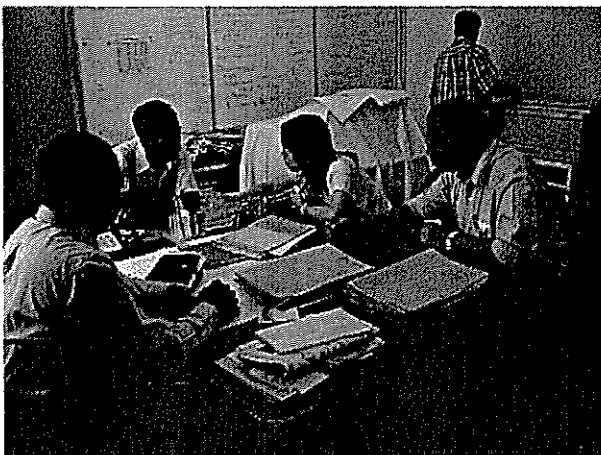
トリンコムアリーへ向かう途中にある食堂兼雑貨屋。主はスリランカ南部から来て家を構え（不法居住）、政治家に請願して正式に居住許可が降りた（シンハラ人）。



北部・東部州セクレタリーと各セクターのディレクターとの会議。手前左端がセクレタリー。



合同会議後、各セクターに分かれ、グループミーティングを行った（写真は農業セクター）。



グループミーティング（保険セクター）。



トリンコムアリーの州政府セクレタリー事務所。

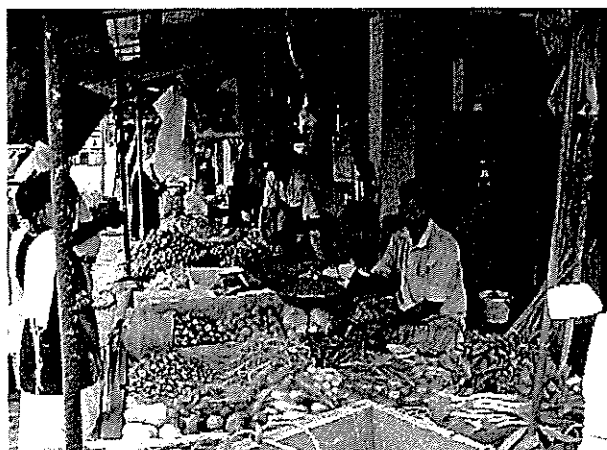
2002年10月15日



セワランカのプロジェク事務所（トリンコモリー）。



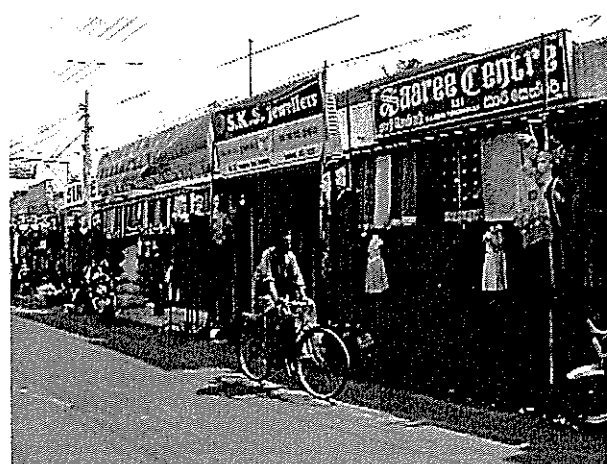
セワランカ事務所（トリンコモリー）。



トリンコモリー市内の常設市場（野菜）。



バス発着場、トリンコモリー市内。



トリンコモリー市内の店は多くの商品を扱っており、日常生活に不自由はない。



学校からの帰宅途中の生徒。トリンコモリー市内の学校は教育程度が高いので、市内に近い避難センターにいる家族は、子どもへの質の高い教育が目的で帰還しない場合も多いということであった。

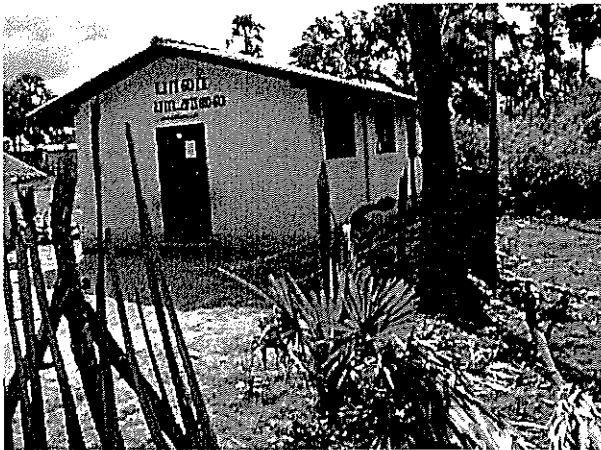
2002年10月15日



セワランカ及び日本紛争予防センターが支援している、再定住住民支援プロジェクトサイト。2001年に開始している（タミル人住民中心）。



セワランカは、各世帯の収益活動向上を目的として、マイクロクレジットを開始した。現在、約60名の会員がいる。写真はこのクレジットを利用して縫製業を開始した会員。父親が死亡し、この長女の収益が頼みの綱。



再定住後に建てられた、コミュニティーホール。自治会活動の拠点であり、末端行政官の事務所も兼ねる。



再定住後、小粒のタマネギ栽培を開始した会員。後ろのタマネギは種子用。



マイクロクレジットを利用し、家を改装し雑貨商を開始した会員。資金不足のため貸付期間が短すぎて、利用価値が低いという意見があった。

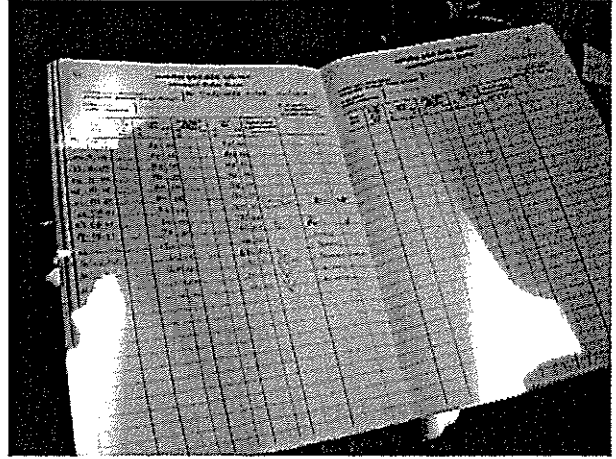


近所の土地を借りて、タマネギ栽培をしている会員。タマネギの販売価格は時期によって大きく変動することから、マーケティングが重要ということであった。

2002年10月15日



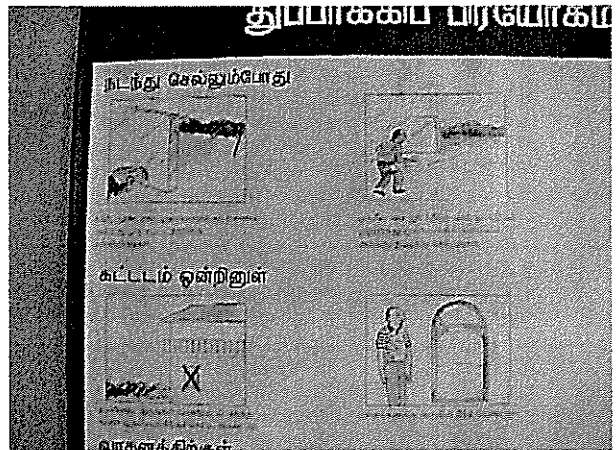
タマネギ栽培で利用しているポンプ。1日Rs. 300を支払って借りているため、グループでポンプの共同利用ができると収益アップにつながるということであった。



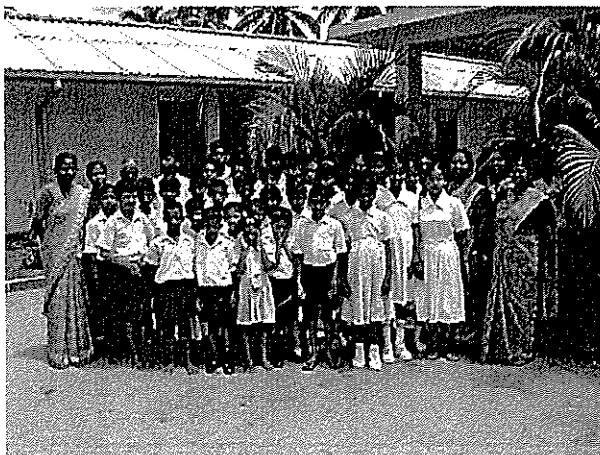
マイクロクレジットで使用している会計用のノート。



トリンコマリー県NGO連合事務所。2名の常勤スタッフが勤務している。



セキュリティ・ガイドライン。NGOにより戦闘やその他危険から身を守る術等を説明している。

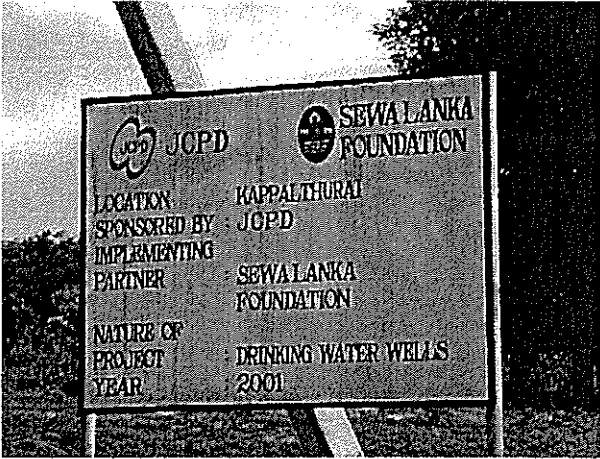


私立の聾唖学校。紛争中も中断することなく教育を行ってきたが、教員の人材不足と民間からの寄付が少なく、社会事業省からの援助金も支払いが滞るなど、経営が困難である。タミル語話者の指導員不足が一番の問題であるとのことであった。



乳児院、孤児院、養老院を運営しているキリスト教団体（屋内の写真撮影は禁止）。ここで働くシスターは、約3年間はジャフナとムライティブで過ごし、今年からトリンコマリーでの勤務を始めた。ここでの問題も資金難であった。

2002年10月16日



セワランカと日本紛争予防センターが共同で支援している、トリンコマリ郊外の再定住村での飲料水用井戸建設サイト。



同村に、3日前に帰還した家族。テント住まい。ワンニ地域に避難していた。



再定住後、約2年が経過した農民。ナス、豆類、トウモロコシ、オクラなどを栽培している。収穫物は近くの幹線道路で仲介業者に販売している。



上のテントの内部。家財道具、生産機材などほとんど何もない。政府からの再定住支援金は、まだ支給されていない。

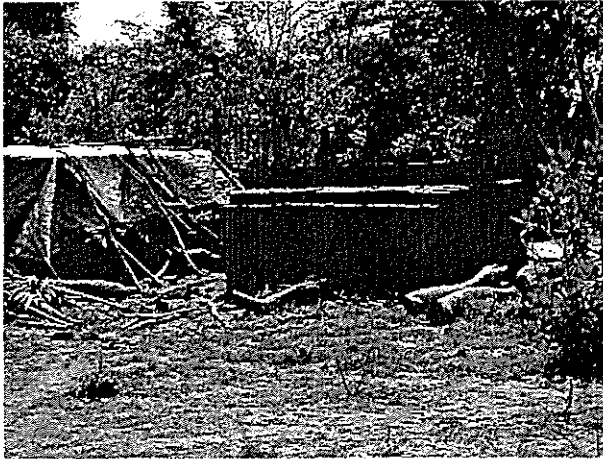


日本紛争予防センターとセワランカの共同で完成した飲料水用井戸。近辺の村からも水汲みに来ている。



同村に帰還し、日干レンガとパルミラ椰子の葉で造った住居。

2002年10月16日



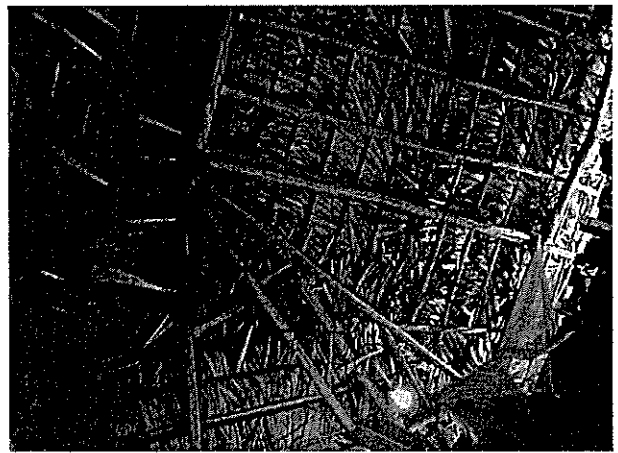
住居建設のためのレンガを焼いている。一部は販売し、換金する。



同村で、日干し煉瓦で造った住居。下の写真はこの家の屋根裏で、電気がある。



以前住んでいた家の外壁だけ残っていた家族。屋根に椰子の葉を利用しているが、このような家は非常にまれである。



屋根を家の内部からみたところ。



同村にある簡易トイレ。東部地域と同じくココナッツの葉で造ってある。



再定住した家族。ワンニ地域から帰還した。



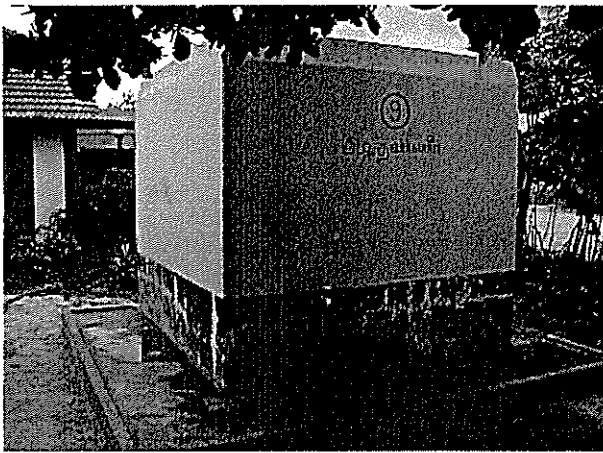
2002年10月18日



セワランカ職員による参加型調査で、自分たちの町の開発についての話し合いをしている。ヒンズー寺院のホールにて。



ワークショップに参集した女性たち。男性とは離れたところにいた。



GTZにより建設された飲料水用タンク（寺院内敷地）。



行商人が多く参拝するヒンズー寺院（ジャフナ市内）。



カーストの高い人たちが訪れるヒンズー寺院（ジャフナ市内）。



結婚式が行われていた（ジャフナ市内）。

2002年10月19日



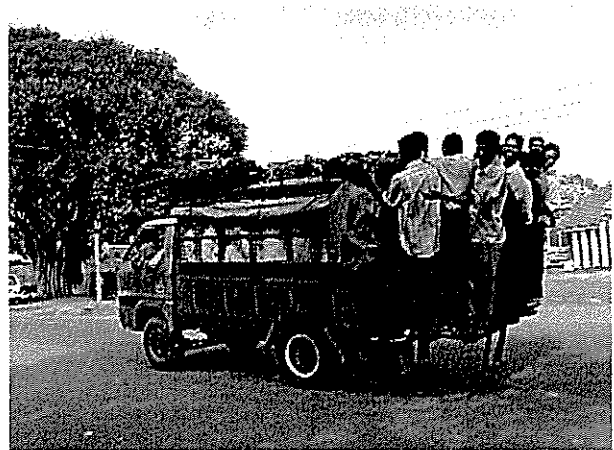
コロombo近郊から、瓦を積んでキリノッチについたトラック。今後、瓦等の建築資材は再定住とともに急激に増加する見通しで、ビジネスチャンスでもある。



マラヴィ地域からジャフナ方面へ牛糞を運ぶトラック。マラヴィからジャフナに行く間に5台の牛糞トラックを追い越した。



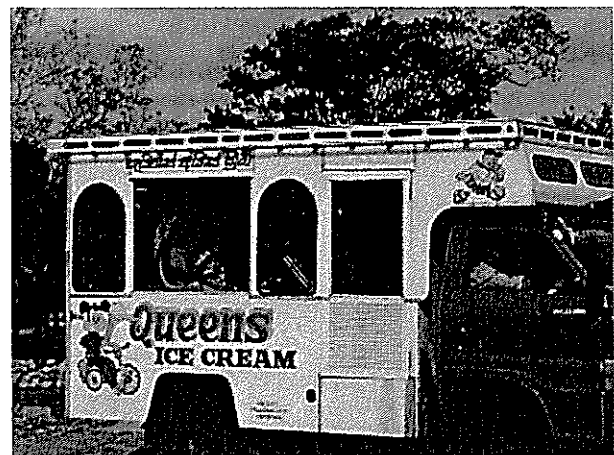
LTTE統治地域内を走る民間バス。満員の乗客は、食糧を入れた大きな袋とともに乗り込んでいた。



キリノッチからジャフナへ向かう乗合トラック。なかはずし詰め状態である。



マラヴィのメインストリート。アスファルトはなくなって土の状態。この道路沿いの家のみ電気がある。



元はアイスクリームを売る冷蔵庫だが、冷蔵設備はなく、自家用車代わりに使われていた。

2002年10月19日



マラヴィとキリノッチの間にある国内避難民の家。親戚の家の敷地内に仮の住居を建てて暮らしている。



マラヴィ～キリノッチ間の道路沿いにあった売店。塩や香辛料、野菜などを売っている。



村のなかでは肉類は売っていないため、野生のイノシシや豚を捕らえて自らさばいている。



幹線道路沿いは、LTTE地域内であっても新しく建設される家が散見される。



紛争で破壊されたキリノッチ市内の店では、オートバイの修理業を営んでいた。ガソリンが安くなり、オートバイ利用人口も増加傾向にあるとのこと。



キリノッチ付近の郡庁（Divisional Secretariat）。政府により改修され、機能している（LTTE統治地域）。